

(事後C)

## 評価委員会総合評価

研究課題名：大気エアロゾル粒子の性状とその変動過程に関する研究

評価委員

委員長：瀬上 哲秀

委員：三上 正男、中村 誠臣、齊藤 和雄、露木 義、山田 眞吾、  
藤部 文昭、角村 悟、横田 崇、蒲地 政文、千葉 剛輝、井上 卓

評価年月日：平成 25 年 12 月 24 日

### 1. 総合評価

- ☒ 非常に優れた研究であった。
- ☐ 優れた研究であった。
- ☐ 研究を実施した意義はあった。
- ☐ 失敗であった。

### 2. 総合所見

本研究では、エアロゾルの物理・化学特性、輸送過程の量的評価、吸湿特性の解明、モデルの開発とエアロゾルの物性と変動に係わる広範な課題について取り組まれた。大気エアロゾルや汚染物質の輸送と変質に関する研究では、観測とモデルに関して多くの成果が得られた。また、領域化学輸送モデルの開発が追加されたことにより、大気エアロゾル粒子の特性と実態の解明、輸送・沈着過程に関する、観測・実験・モデリングを融合させた、気象研究所にふさわしい内容の研究として取組まれた。

また、本研究は、福島第一原発事故やPM2.5の問題など、社会的関心の高い問題と関連が深いこともあり、報道発表等にも積極的に取り組んでいた点を評価する。

査読論文はレター誌、投稿中を含めて76編（うち18編が国際誌での主著者原著論文）が投稿された。この数は特筆に値するものであり申し分ない。

当初想定されていなかった、エアロゾル輸送モデルの現業化への貢献や、最新型電子顕微鏡による研究成果は高く評価できるが、一方で、本研究単独では成果の出口が少ない。大気環境の理解と評価の高度化に加え、予報モデルや気候モデルへの直接間接の寄与も期待できるため、雲物理や放射等の所内の関連する研究グループのほか、本庁や他機関との連携を密にして欲しい。また、次期中期研究計画では、次期静止気象衛星ひまわりの観測データの利活用含めた検討をして欲しい。さらに、新型電子顕微鏡による解析データのデータベース化と研究コミュニティへの公開についても、取り組みを加速して欲しい。